

目的 近年はファッションも多様化を極め、パンツルックといわれるスラックススタイルが流行し、オールシーズンに着用される傾向になって、スラックスは女性の衣生活にすっかり定着してきた。本研究はスラックス設計上最も重要と思われる股上前後長に着目して、実験・観察を行ない、スラックス原型の設計について考察した。

方法 股上前後長に影響を与える因子A：後ろめたり寸法と、B：後ろめたり下がり寸法の2因子、3水準とリ上げ、9種類のスラックスを製作して股ぐり、股高周径、大腿最大囲の3部位について官能検査法による着用実験を行った。尚、パネルは被験者3名と、観察者として教官及び学生の5名である。実験データは田口法の累積法で解析を行った。次に人体の形態因子とスラックス原型の関係を知る為、被験者から石膏法で下半身のヌードパターンを採取し、先に行った着用実験のデータと併せて身体への適合性について検討した。

結果 静止時において、被験者では股高周径、観察者では3部位共因子Aに危険率1%水準で有意差が認められた。動作時において、被験者では因子Aについて有意差が認められず、観察者は静止時同様、有意差が認められた。このことから後ろめたり寸法の変化が身体への適合性、審美性に影響を与えると思われる。

ヌードパターンと適合性の良かった実験用原型を検討したところ、前者の股ぐり形態は後者に比べてかなり深く、試着観察を行ったところ股上が長く見え、ヌードパターンの股ぐり形態を用いるのは審美性に問題があると思われる。